

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

A Comparative Study of Food Sharing in Hunter-Gatherer Societies : Cases from the Aka, Ache and Inuit

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2021-04-28 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 岸上, 伸啓 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/00009745

狩猟採集民社会における食物分配に関する比較研究
—アカ、アチェ、イヌイットの事例を中心に—

岸 上 伸 啓

狩猟採集民社会における食物分配に関する比較研究 —アカ、アチェ、イヌイットの事例を中心に—

岸 上 伸 啓

1. はじめに

狩猟採集民は、移動キャンプや居住地を同じくする人々と時間や場所、活動、資源をシェア (share) する傾向が顕著である (Ingold 1988; 今村 1993, 1996; 丹野 1991)。特に彼らの間では食物のやり取りが頻繁に見られる。この食物のやり取りは食物分配 (food sharing) と呼ばれ、狩猟採集民社会の特徴のひとつであると言われている (Dowling 1968; Lee 1993)。

狩猟採集民の食物分配は、食物の移動に着目すると移譲 (分与・贈与) や交換、再分配の形態に分類できる。最近まで人類学者はそれらすべての形態の食物のやり取りを食物分配という概念でひとくくりにしてきた (岸上 2003a, 2007; Kishigami 2004)。言い換えれば、文化人類学者は分配を複数の形態をとる実践として取り扱ってきた。しかし、1990年代末以降、多くの研究者が、狩猟採集民の食物分配は交換ではないという見解を表明するようになった。たとえば、J. ウッドバーン (Woodburn 1998) は、狩猟採集民の分配とは交換ではなく再分配であると主張しているし、T. ウイドロック (Widlök 2017) は、分配は与え手と受け手の2者間での交換ではなく、もらう側 (受け手) の要求に基づいてモノやサービスの所有者 (与え手) 側が手放す (与える) 社会的実践であると考えている。

本稿では、狩猟採集民社会の中で、アフリカのアカ社会、南アメリカのアチェ社会、北アメリカのイヌイット社会における食物分配の形態や機能・効果を比較し、それらの間に見られる共通性や差異について検討する。なお、本研究において、これらの3社会を選んだ理由は、食物分配について他の狩猟採集民社会と比べ詳細な調査が行われ

てきたからである¹⁾。

2. 食物分配を比較するための枠組み

食物分配は狩猟採集民社会の特徴のひとつであると言われているが、文化人類学者は「分配」を明確に定義することなく、あいまいにしたままで研究を続けてきた。最新の定義は、分配 (sharing) の普遍的な特徴は要求 (demand) に基づく食物やモノのやり取りであるというN. ピーターソン (Peterson 1993) の主張を取り入れたT. ウイドロック (Widlök 2017) の定義である²⁾。ウィドロックは、分配を「共有された要求に基づいて価値ある物事 (what is valued) にアクセスを可能にする社会的実践」(Widlök 2017: XVII) と定義している。この定義では、与え手ではなく、受け手の要求に力点が置かれている。言い換えれば、それは、食物などを欲しい人が、それらを持っている人に要求することを契機に、所有者がその食物などの一部もしくはすべてを手放し、要求した受け手がそれを入手することができる行為である。この定義は視点が独創的である一方、その有効性については未検証で、今後、世界各地の多様な事例による検証を待たねばならない。

ここでは、現時点での汎用性を考慮して、霊長類学での食物分配の定義である「力づくではなく個体から個体に食物が移動すること」(西田・保坂 2001: 263-264) を暫定的に使用する。その上で、3事例を比較検討することによって、ウィドロックの (食物) 分配の定義の有効性も検討したい。

本稿では、食物分配を比較検討するための観点、すなわち食物分配の形態、機能・効果、特徴について説明した後、アフリカのアカ、南米のアチェ、北アメリカのイヌイットの食物分配について紹介

する。そしてそれら3社会の食物分配を比較するとともに、(食物)分配の定義について検討を加える。

2.1 食物分配の形態

食物の移動する形態には、すでに紹介したように移譲 (transfer)、交換 (exchange)、再分配 (redistribution) がある (岸上 2003, 2007: 30; Kishigami 2004; Woodburn 1998)。この形態を説明するために、獣肉を所有するAと食物を持っていないBという個人がいると仮定しよう。

移譲もしくは分与とは、Aが所有している獣肉のすべてもしくは一部をBに一方向的に与えることを意味する。この場合は、将来的にBがAに獣肉を戻したり、返礼したりすることを前提としない。

交換とはAはBに獣肉のすべてもしくは一部を与えるが、その対価物として即時的もしくは将来的に獣肉もしくはそれ以外のモノやサービスを戻したり、返礼したりことを意味する。食物の流れを見ると、AとBとの間で食物やサービスが相互に移動することを意味する。

再分配とは、Aやその他のハンターらが持っている獣肉を、他の誰か (センターとなる人もしくは組織) のもとに一度、集め、そこからAを含めた人々に獣肉のすべてもしくは一部を与えることを意味する。

2.2 食物分配の機能・効果

食物分配の機能については、これまでの文化・生態人類学研究によって複数の機能や効果があることが指摘されてきた。ここでは、それらのうち5つの仮説を検討する (岸上 2003, 2008: 30-39)。なお、ここでは進化生態学に基づく血縁淘汰仮説、互恵的利他主義仮説、容認される盗み仮説、社会的シグナル仮説、協働労働仮説については、検証することが難しいので取り扱わないことをお断りしておく³⁾。

第1は、リスクを分散・低減させる保険機能である。食物分配は、狩猟採集活動に起因する食料獲得の不安定性を解消する手段であるという見解である。これを本稿では、リスク分散機能と呼ぶ。

第2は、物質的かつ政治的な平準化機能である。狩猟採集民は、獲物を分かち合うことによって、個人間や家族間で所有する食物量の格差が低減されるという見解である。同時に政治的な力関係における平等主義的な関係を維持するという効果がある。これを本稿では、平準化機能と呼んでおく。

第3は、社会関係の再生産・維持機能である。食物分配は、特定の親族間や特定の隣人間、特定の狩猟への参加者間といった特定の社会関係に沿って行われるので、食物をやり取りすることによって食物の与え手と受け手の間の関係が確認され、維持されるという見解である。また、食物分配を行う者の間に親族意識や仲間意識が共有されることにより、社会的アイデンティティが維持・再生産されるとの指摘もある。別言すれば、既存の社会関係に沿って食物分配をしないことは、その社会関係や仲間意識の解消や放棄を意味する。これを本稿では、社会関係再生産機能と呼んでおく。

第4は、いつも多くの獲物を他の人々に分配する腕の良いハンターは、社会的な名声を獲得することができるという見解である。ただし、このことはハンターがコミュニティにおいて必ずしも政治的権力を持つことを意味しない点に留意しておく必要がある。これを本稿では、社会的名声獲得機能と呼んでおく。

第5は、M.モース (Mauss) の指摘¹⁾ であるが、食物分配は一時的にせよ、与え手と受け手の間に優劣関係や受け手に負い目・負債感情を生み出すという見解である (モース 2014: 197, 295, 377)。これを本稿では、優劣関係・負い目創出機能と呼んでおく。

2.3 食物分配の特徴

文化・生態人類学研究者は、機能や効果以外にも狩猟採集民の食物分配の特徴について指摘している。これまでに指摘されてきた食物分配の特徴について整理すると、次のようになる (岸上 2003, 2007: 30-39)。

第1は、対面的な小規模集団では食物分配は頻繁に行われるが、人口規模が大きくなると分配ネットワークは機能しなくなる (Kaplan and Hill

1985)。

第2に、大量のもしくは大きい獲物は広範に分配される傾向がある一方、少量のもしくは小さな獲物は分配されない傾向がある (Graburn 1969 : 66-67; Kaplan and Hill 1985)。

第3に、狩猟採集民の食物分配は、人間と環境との関係に関する環境観 (Bird-David 1990) や人間と動物との関係に関する世界観 (Fienup-Riordan 1983; Bodenhorn 1990; Nuttall 1991; Stairs and Wenzel 1992: 5) と結びつき、環境観や世界観は、食物分配の倫理的基盤となっている。

第4は、狩猟採集民の食物分配は、食物が欲しい側 (受け手) の要求を契機とするデマンド・シェアリング (demand sharing) である (Peterson 1993; Widlok 2017)。

なお、上記の特徴は、どの程度まで一般化できるか、検証されていない。

以上で紹介した食物分配の形態、機能・効果・特徴について3社会の事例を用いて比較検討する。その前に、アカ社会、アチェ社会、イヌイット社会における食物分配について紹介する。

3. アカ社会における食物分配

3.1 アカの生業と社会

アカ (Aka) は中央アフリカの熱帯雨林地域に住む狩猟採集民のグループであり、かつて「ピグミー」と総称された人々に属する。ピグミー・グループでも地域や集団によって主要な生業形態や居住集団の構成、近隣の農耕民社会や市場経済とのかかわり方には差異が見られる (北西 : 1997, 2002, 2004; 竹内 1995; 市川 1991; Bahuchet 1990; Kitanishi 1996)。

ここでは北西功一が1990年代に調査を行ったコンゴ共和国リクアラ州ドンゲー地区リンガンガ・マカオ (Linganga-Makaou) 村周辺で生活を営んでいるアカを事例として取り上げる。この村の周辺には約350人が居住し、親族関係にある3~20家族 (15~100人) が居住集団を形成している (北西 2004: 57)。居住集団を構成する家族は離合集散するため、その構成は流動性に富んでいる。

このアカのグループは1年の4~8か月を森の中で過ごし、残りを近隣の農耕民の村の近くへと

移動し、生活している。森の生活は数日から数週間ごとに森の中でキャンプ地の移動を繰り返し、狩猟や植物食の採集を行っている。一方、村の生活では、農作業の手伝いや雑用、銃猟、採集した野生植物と農作物との交換を行い、キャッサバなどの農作物や銃猟から得た肉、イモムシなどを食べている (北西 2004: 57)。この地域のアカは、近隣の農耕民との接触はあるが、他の地域のピグミー・グループと比べると、外部の農民社会や市場経済からの影響は相対的に小さい (cf. 市川 1991; Buhachet 1990)。

森の狩猟採集活動を見てみよう。彼らの主食は、野生ヤマイモやナッツ類、獣肉類、ハチミツ、農作物などである (北西 2004: 60)。キャンプ集団の大きさは、小さいもので3~6家族 (15~20人)、大きなもので13~17家族 (約60人) である (北西 2004: 68)。

女性は野生ヤマイモなどの根菜類やナッツ類を採集する。カロリー摂取の視点から見ると、野生ヤマイモなどから17%、ナッツ類から17%と、採集活動によって入手する食物がカロリー摂取において重要なウエイトを占めている (北西 2004: 60)。採集活動による食料獲得は比較的安定しており、女性ひとりあたりの採集量は、家族の員数が多くなれば多くなるほど、増大する (北西 2004: 64)。一方、男性はアフリカミツバチやハリナシミツバチの巣からハチミツを採集する。カロリー摂取の視点から見ると、15%を占めている (北西 2004: 60)。なお、ハチミツの採集量は個人差が大きい (北西 2004: 63)。

主な狩猟活動は、罟猟、槍猟、網猟であり、カロリー摂取の視点から見ると、全体の摂取カロリーの約26%を占めている (北西 2004: 60)。罟猟は個人猟で、マンガースなどの小型動物から100キログラムを超えるジャイアントフォレストホッグなど多様な動物を捕獲する。その多くは1頭当たりの重量が20キロ以上であると言う (北西 1997: 9)。この罟猟は、狩猟による捕獲量全体の75%を占める (北西 2004: 61)。槍猟で最も多く捕獲するのは、20~100キログラムのブッシュピッグである (北西 1997: 9)。網猟では、重量が約5キログラムのブルーダイカーがもっとも多く、そ

れ以外に約15～25キログラムの中型ダイカーを捕獲する（北西1997: 9）。なお、1日当たりの狩猟から得られる肉の量は個人間で大きな差がある（北西 2004: 61）。

また、森の中での生活とはいえ、野生の動植物との交換によって農耕民から入手したキャッサバなどの農作物からのカロリー摂取量が22%を占めている。

キャンプ集団は、何らかの親族関係にある複数の家族から構成されているが、集団内では社会的かつ政治的な平等性が高い（北西 2004: 58-59）。

3.2 アカの食物分配

北西（1997, 2002, 2004）によると、彼の調査地のアカの獲物の分配は、少なくとも3回以上行われる。たとえば、狩猟場での獲物の分配、キャンプ地での獲物の分配、キャンプ地での料理の配布による分配に識別できると言う。時系列に整理すると、同一の獲物の分配は、数次にわたり、それぞれ第1次分配、第2次分配、第3次分配と呼ぶことができる。

3.2.1 肉類の分配

罨猟は個人猟であるため、狩猟地での分配は行わない。罨の所有者が、獲物の所有者である。キャンプ地に帰ってから獲物の所有者が肉を自主的に分配する。

槍猟では、捕獲地やキャンプ地で、第1次分配が行われる。この第1次分配は、規則に則って行われ、2番目に獲物に槍を刺した者に腰の部位が、3番目に槍を刺した者に頭の部分が与えられる。最初に槍を刺した者と槍の所有者が異なる場合には、前者には尻の部位が与えられる。その後、獲物の残りの部位がキャンプ地に持ち帰られると、獲物肉を手に入れた人は自主的に肉をキャンプの他の家族に第2次分配する。

網猟では、捕獲地で第1次分配と第2次分配が行われ、網猟に参加していない家族にはキャンプ地で第3次分配が行われる。網の所有者が、獲物の所有者となる。網猟では捕獲地で網にかかった獲物を最初に捕まえた人に胸と腹、腸の部位が与えられ、獲物の網を張った人には尻の部位が与えられる（第1次分配）。また、網猟中に網の所

有者の近親者の女性（主に妻）が、獲物を解体し、現場にいる女性たちに分配する（第2次分配）。さらにキャンプ地に帰ると、肉の所有者や肉を受けとった女性が自主的にキャンプ地の他の家族の女性に第3次分配を行う（北西 1997: 9）。

狩猟活動での第1次分配は規則で分配する部位が決められている。第2次分配では肉の所有者や第1次分配によって肉を手に入れた人が自主的に分配を行う。約10キログラム以上の肉は必ず分配される。そして全体の約70%の肉が分配される（北西 2002: 74）。肉の量が多ければ、キャンプの多くの家族に分配するし、肉の量が少なければ、一部の家族へのみ分配するが、全く分配しないこともある。肉の第2次分配において、誰にどれくらいの量を分配するかを決めるのは、捕獲や第1次分配によって得た肉の所有者である（北西 2002: 70, 74; 2004: 66）。

3.2.2 植物性食物の分配

料理される前に植物性食物を女性が他の女性に分配することがある。それは、(1) 果物を大量に持ち帰った時、(2) 野生ヤマイモを大量に（5キログラム以上）採集した時、(3) キャッサバやその葉、アブラヤシの実などの農作物が大量に村から運ばれてきた時などである。植物性食物は、肉類とは異なり、親族のみに分配する傾向がある（北西 1997: 12-13）。

3.2.3 ハチミツの分配

ハチミツの所有者は、ハチの巣を発見した人である。ハチミツを採集した場合は、その場にいる人々で食べるが、残ったハチミツはキャンプ地に持ち帰り、そこにいる人々に第2次分配する。ハチミツの場合は、キャンプ地の中で近くに住んでいる人や親族関係的に近い人により多く分ける傾向があるものの、キャンプ全体に分配する（北西 2004: 75）。

3.2.4 料理の分配

入手した肉や植物性食物は、ともにキャンプ地内の各家族（世帯）の中心的な女性（妻や母）のもとに集められる。その女性は、肉とナッツなど数種類の植物でシチュー（煮込み料理）を作る。それから自分が料理を分けようと考えている家族の女性たちから皿を集め、その皿に料理をもつ

て分配する（北西 1997: 4, 2004: 66）。この料理の分配では、料理をした女性が、親族関係や空間的な近接性などを考慮しながら、自主的な判断によって与える相手や分量を決めている。

一人の女性を作る料理の量が多くなればなるほど、分配数は増えるが、平均は5皿分で、1皿は夫ら男性用、3皿は他の家族に分配し、残り1皿をその女性と彼女の子供たちが食べる（北西 2004: 69）。なお、男性はムバジョと呼ばれるキャンプ地の中央にあるたまり場で男性用に分けられた一皿を、そこにいる男性たちとともに食べる（北西 1997: 4, 2004: 66）。

小さなキャンプでは成人女性が4、5人（すなわち4、5家族）なので、常に料理を分け合うことができる（北西 2004: 69）。キャンプ地の女性は夕方と同じような料理を作り、それを日常的に分配しあっている（北西 2002: 89）。自分が調理した料理の約80%は夫を含む男性と他の家族にあげ、約20%は自らとその子供たちが食べている。このことは、各家族の食事の大半は他の家族の女性で作った料理をもらって食べていることを意味する（北西 2002: 76）。また、小規模なキャンプ地では、全家族に料理が分配されるため、各家族が食べる料理の内容と分量はほぼ同じである（北西 2002: 89）。

一方、農耕民の村の近くで形成する大きなキャンプ地では、家族数（人口数）が多く、自分が作った料理をすべての家族に分配できないので、空間的に近くに居住する親族の家族に分配する傾向がある（北西 2004: 74）。

3.3 アカの食物分配の特徴

以上の北西功一の調査に基づくアカの森の生活における食物分配の特徴は次のように整理することができる。

第1に、数度にわたる肉や料理の分配を通して、同じキャンプ地に住むすべての家族や個人は、ほぼ同じ量と内容の食物や料理を入手している。分配は、狩猟における獲得量の個人差を平準化する効果がある（北西 1997: 12, 2004: 78）。

第2に、肉や植物性食物が大量にある時は全体に分配されるが、分量が少ない場合は分配されな

いこともある（北西 1997: 11, 13）。分量の多寡が分配において重要な条件となっている。また、アカが植物性食物よりも価値があると評価しているブッシュピッグやブルーダイカーの獣肉は、少量でも広範に分配される傾向がある（北西 1997: 22）。

第3に、獲物の第1次分配は規則によるが、第2次分配や第3次分配はその肉の所有者や料理を作った女性の自主的な判断による（北西 1997, 2002: 70, 2004: 66）。

第4に、小さなキャンプ集団内では全面的な分配が行われ（北西 2004: 69）、大きなキャンプ集団内では選択的な分配が行われる傾向がある（北西 1997: 15）。小さなキャンプ地ではその場にいることが分配を受ける条件となるが、大きなキャンプ地では親族関係や小屋の空間的な近接性が分配を受ける条件となる（北西 1997: 19, 22）。

第5に、食物分配は与え手と受け手の関係を作り出すが、食物分配を通してその親密な関係は幾重にも重なりあっており、関係の網の目が作り出されている。食物分配はそのような社会関係を維持し、日々、確認する手段となっている（北西 1997: 21, 2002: 90, 2004: 85）。

第6に、アカの食物分配の特徴のひとつは、デマンド（要求）に基づくと言うよりも規則や自主性に基づいた分配である。

最後に、ここで提示した特徴は、すべてのアカ・グループに当てはまるのではない点を強調しておきたい。ロバイ地方のアカを調査したパウシェは、肉の第2次分配は親族関係に基づいていると指摘している（Bahuchet 1990: 33）。また、ムンプトゥ村付近のアカを調査した竹内は、料理は空間的にも親族関係的にも近い人に分配されていると指摘している（竹内 1995: 72）。各グループの生業形態や政治・経済・社会的状況の歴史的な違いによって差異が出てきたものと考えられる。

4. アチェ社会における食物分配

4.1 アチェの生業と社会

アチェ（Ache）は南アメリカ・パラグアイ東部の低地亜熱帯森林に住む狩猟採集民である。彼らは1975年ごろまで移動生活を送っていたが、現

在ではキリスト教団体が創設したミッション集落に定着し、狩猟採集と焼き畑農耕を組み合わせた経済活動で生計を立てている。

1980年代の調査からの推定であるが、集落に住み着くまでは15人～28人で移動集団 (band) を形成し、1か所に1～4日留まるだけで、食料を求めて移動を続けていた。彼らが狩猟する対象は、鹿、アルマジロ、クビワベッカリー (以上、個人猟) とクチジロベッカリー、ネズミ目の動物であるバカ、オマキザル (以上、集団猟) である。また、ハチミツを採集し、食料とした。以上の動物やハチミツは、おもに男性ハンターが捕獲し、採集した。男性は1日平均6時間程度狩猟活動に従事するが、1日の狩猟で1人のハンターは約4キログラムの肉を獲得したと言う。獲物を全く獲得できない確率は40%程度であった。また、入手した獲物の約60%は集団猟に由来していた。男性ハンター間には狩猟能力に明確な差が見られた。一方、女性は、でんぷん質を含むヤシ (starchy palm fiber) や果実、昆虫の幼虫を採集した (Gurven, Hill and Kaplan 2002: 96)。摂取カロリーの点からみると60～80%が獲物の肉に由来し、その次がハチミツ、果物、植物食、昆虫の幼虫の順番であった (Kaplan, Hill, Hawkes, and Hurtado 1984: 113)。

1978年に北部アチェは、カトリック派のミッション集落チュパ・ポウ (Chupa Pou) に定着したが、その中のひとつのグループがそこを出て、1980年にプロテスタント派宣教団の提案に従って、ミッション集落アリオ・バンデラ (Arryo Bandera) を創設した (Gurven, Hill and Kaplan 2002: 96)。1998年のアリオ・バンデラには117人 (23核家族) が住んでいた。各世帯 (核家族) は、それぞれ100メートル程度の間隔をあけて約16平米の木造家屋の住居を構えていた。アチェの人々は、マニオクや豆類、ピーナッツ、トウモロコシ、サツマイモ、サトウキビを小さな畑で耕作するようになったほか、ニワトリ、ブタ、ウシ、ウマ、ペット用サル、ハナグマ、ベッカリーを飼育するようになった。さらに、パラグアイ人が経営する農場や牧場で働き、その賃金で衣類やお茶、塩、砂糖、パン、パスタを購入した。また、時折、ヤシの葉製うちわ、マット、弓矢のような工芸品を制作し、

観光客や宣教師に売ることもあった。なお、ミッション集落での食事は、約80%が農作物、約9%が店舗で購入した食料品、約11%が野生獣および家畜の肉に由来していた。また、集落内のアチェの間では農作業や牧畜などの協同作業や助け合い、道具の貸し借りが頻繁に行われていた (Gurven, Hill and Kaplan 2002: 97)。

1998年時点でアリオ・バンデラ集落を拠点とするアチェは、時間に換算すると約20%を狩猟や採集をしながら森の中で過ごした。森の中のキャンプでは、半径3～5メートルの空間内に3～6の焚火をつくり、それらの周りに3～10の核家族が一時的な小屋を建てて過ごした。

H.カップラン (Kaplan) らは、1981年10月から1982年5月の間に森の中での狩猟採集に9回同行し、合計81日間の狩猟採集活動および食物分配に関する調査を実施した (Kaplan and Hill 1985; Kaplan, Hill, Hawkes, and Hurtado 1984)。一方、M.ガルヴェン (Gurven) らは、アリオ・バンデラ集落で1998年2月から5月まで食物分配に関する調査を行った (Gurven, Hill and Kaplan 2002)。以下に示すのは彼らの調査結果である。なお、彼らの調査研究は、食物分配の意義を進化生態学に由来する仮説で数量化したデータを用いて検証しようとしたものであり、当事者間での食物分配のやり方や形態などに関する質的な記述が十分でない点を指摘しておきたい。

4.2 アチェの食物分配

4.2.1 森の中のキャンプ地での食物分配

カップランらの研究 (Kaplan and Hill 1985; Kaplan, Hill, Hawkes, and Hurtado 1984) は、狩猟時や採集時の分配、キャンプに帰ってからの分配、料理の分配に関する情報が峻別されておらず、一括して数量化されている。筆者はできうる限り、他の研究と比較できるように情報の整理を試みた。

森の中のキャンプ地では3～10の核家族が集まって居住することが多いが、食料消費の単位は核家族である。一方、狩猟や採集で得られた食べ物は、キャンプ内で頻繁に分配される。アチェの人々は食べ物を入手してから1日以内に消費し、貯蔵することはほとんどない。その特徴をカップ

ランらは次のように整理している (Kaplan, Hill, Hawkes and Hurtado 1984: 114)。

第1にアチェの人々は、カロリー摂取の点から見ると大半の食べ物を核家族外の人からもらっている。狩猟においてはハンターの技量に格差があるため、常に多くの獲物を獲得する者とあまり獲物を獲得できない者が存在するが、ハンターは獲物を得たときには、その大半を他の人々に分け与えている。これはハンターが自らの核家族外の人に獲物を分配する一方で、彼もしくは彼の核家族のメンバーは他の核家族に属するハンターから獲物をもらっている (Kaplan and Hill 1985: 229)。

第2に、森の中のキャンプ地で分配される対象は種類によって違いが認められる。もっとも多く分配されるのは獣肉、それからハチミツ、果実などの採集物、ミッション集落から持ってきた食物の順番になる (Kaplan and Hill 1985: 229)。これらの食物の間には分配のパターンにも違いが見られる。獣肉やハチミツはハンター間やキャンプの核家族間で分配するが、ミッション集落から持ってきた食物は核家族内で分配し、消費する傾向が強い。言い換えれば、獣肉やハチミツはキャンプ内の他の核家族に頻繁に分配されており、特定の人や近親族により多く分配されているわけではない (Kaplan and Hill 1985: 235)。一方、それ以外の果実や根菜など、多くの人が同時に採集することができる食物は、両親や子供、兄弟姉妹、配偶者など近親族との間でより多く分配されていた。別言すれば、大量に採集できた時以外は、核家族の単位を越えた分配の対象にはならない。

第3に、獣肉に関していえば、キャンプ地内で近親族の間で分配される量や頻度は、非親族間の場合とほとんど変わらない。(Kaplan and Hill 1985: 229, 235)。森の中の狩猟地やキャンプ地での獣肉の分配は、同じ狩猟に従事していることや同じ場所にいることなど、親族関係以外の要因が働いている。

第4に、森の中の生活においては、食物分配によってキャンプ集団内の人々は、比較的安定して食べ物を入手することができ、より良好な栄養状態を保つことができていた (Kaplan and Hill 1985: 236)。

4.2.2 ミッション集落と森の中のキャンプ地での食物分配

20世紀末のアリョ・バンデラ集落とその周辺の森でのアチェの食物分配を紹介しよう (Gurven, Hill and Kaplan 2002)。当時、アチェは集落から狩猟・採集に出て行くが、狩猟・採集が終わると集落に戻っていた。1年のうち約80%の時間を集落で過ごし、約20%の時間を森の中で過ごしていた。

集落を拠点とする生活は、アチェの狩猟・採集活動にもいくつか変化をもたらした (Gurven, Hill and Kaplan 2002: 96)。第1に、以前はハンターが自ら捕殺した獲物の肉を食べることを差し控えるというタブーを持っていたが、そのタブーを守らなくなった。第2に、狩猟対象に変化が見られた。クチジロベッカーやハナグマの捕獲量が低下した一方で、アルマジロやパカ、オマキザルなどがより多く狩猟されるようになった。第3に、森の中でのキャンプ (居住) 集団の規模は以前と比べ小さくなるとともに、1回の狩猟・採集旅行の平均期間が短くなった。

4.2.2.1 森の中のキャンプ地での食物分配

森の中での食物分配について紹介する。森の中での狩猟・採集では、ハンターは獣肉 (平均5.8キログラム) とハチミツ (平均6.5キログラム) を入手すると、キャンプ地に戻ってから他の人々に広く分配する (Gurven, Hill and Kaplan 2002: 99)。狩猟・採集によって手に入れた食物の約80%を同じキャンプ地の他の核家族に分配している。具体的には、ハンターや採集者は、各自が入手した獣肉の89%を、ハチミツの87%、ヤシの新芽の73%、ヤシのでんぷん部分の70%、果実の70%、昆虫の幼虫の59%を他の核家族の人々に分け与える。

森の中では分量が多い肉やハチミツは、キャンプ地内の多くの家族に頻繁に分配される傾向がある (Gurven, Hill and Kaplan 2002: 104)。ひとつの核家族が森の中で入手した食物は、平均すれば他の2.6核家族もしくはキャンプ集団全体の約41%の人々に分配している (Gurven, Hill and Kaplan 2002: 104)。各核家族は、他の核家族が狩猟・採集した食物の約56~84%を受け取っているという

(Gurven, Hill and Kaplan 2002: 105)。ここで示したように、それぞれの核家族が入手した食物の半分以上を他の核家族に与え、半分以上の食物を他の核家族から受け取っている。

すでに指摘したように狩猟の成果についてはハンター間に格差がある。このため、キャンプ地内の何人かのハンターのみが獲物をもたらし、それ以外のハンターはまったく獲物をもたらさないことがある。このため、キャンプ地内にはより多くの食物を与える核家族とより多くの食物を受け取っている核家族が存在する。キャンプ地内では食物分配によって、食物摂取における核家族間の平準化をもたらしていると推定できる。

4.2.2.2 ミッション集落での食物分配

117人(23核家族)が居住しているミッション集落においても食物分配が行われている。各核家族を単位としてみた場合、マニオクや豆類、トウモロコシ、イモ類のような農作物の78%、ニワトリや牛肉、ロバなどの畜産肉の91%、アルマジロやパカ、サル、バク、ベッカリーのような森から村に持ち帰られた獣肉の90%、ハチミツや昆虫の幼虫、果実のような森の産物の91%、パンや食塩、砂糖などのような店舗で購入した食物の75%が他の核家族に分配されている(Gurven, Hill and Kaplan 2002: 99)。

ミッション集落では、ある核家族が入手した食物は、平均で他の2.1核家族(集落全体の核家族総数の約9%)に分配している。ロバ肉(65キログラム)や牛肉(110キログラム)のような家畜肉は、平均で他の4.4核家族に分配されている。同様に、森から持ち帰られた獣肉は、2.3核家族に、他の森から持ち帰られた食物は2.7核家族に、農作物は1.6核家族に、店舗で購入した食物は3核家族に分配されている(Gurven, Hill and Kaplan 2002: 105)。

ミッション集落ではほぼすべての種類の食物は、近親族間でより多く、より頻繁に分配されている。また、食物分配を行う核家族の住居の位置、すなわち、住居間の距離や相手の住宅が見えるか見えないかも影響しており、物理的に近い場所に住んでいる核家族に分配する傾向が見られる(Gurven, Hill and Kaplan 2002: 111)。すなわち、ミッシ

ョン集落では、食物分配の分量や頻度は親族関係と物理的距離が重要な条件である(Gurven, Hill and Kaplan 2002: 112)。

4.2.3 森の中のキャンプ地とミッション集落における食物分配の連続性と違い

森の中とキャンプ地とミッション集落では食物分配の違いが見られるとともに、共通性も見られる(Gurven, Hill and Kaplan 2002: 113)。まず、共通点から見てみよう。

キャンプ地でもミッション集落でも、頻繁に食物分配が行われている。両方の場合とも、ある核家族が入手した食物の総重量の約80%は他の2から3の核家族に分配されている。

キャンプ地でもミッション集落でも、食物分配を行う核家族間の物理的距離が重要である。両方の場合ともより近い場所に住んでいる核家族間でより頻繁に食物分配が行われている。

一方、森のキャンプ地とミッション集落での食物分配の違いは、次の通りである。森のキャンプ地では獲物や採集物は、ほぼすべての核家族の間で分配が行われているが、ミッション集落内では67%の核家族間で分配が行われているに過ぎない。また、両方において核家族間の物理的距離が食物をだれにどの程度分配するかという点で重要な要因となっている。そして、ミッション集落においては、食物をだれに分配するかという点で親族関係が重要な要因となっている。同じ場所にいる核家族数が少ない場合は、少量の食物でも全核家族間で分配できるが、核家族数が多い場合は、食物をすべての核家族に分配することは難しいため、分配する対象を選ばざるを得なくなる。すなわち、少人数のキャンプ地ではそこにいること(物理的近接性)が、多人数の集落やキャンプでは住居間の物理的近接性と親族関係が食物分配を行う上で重要な要因となっている。

4.3 アチェの食物分配の特徴

以上の、1980年代初頭と1990年代末に実施された調査をもとにアチェの食物分配の特徴を整理してみたい。

第1に、キャンプ地でもミッション集落でも、頻繁に食物分配が行われている。しかし、両者の

間では、分配する内容や相手に違いが見られる。キャンプ地では同じ場所にいるという物理的近接性（距離）が重要であるが、ミッション集落では住居間の物理的近接性（距離）に加えて親族関係が重要な要因となっている。

第2に、各核家族は入手した食物の半分以上を他の核家族やその成員に分配している。

第3に、獣肉やハチミツなどの量の多い食物は広範囲に分配される傾向があるが、少量の食物は分配されなかったり、限定した相手に分配されたりしている。

第4に、森のキャンプ地では、食物分配によって食物摂取における核家族間の平準化をもたらしていると推定できる。

カップランらは、食物分配に関連する社会関係についてほとんど検討を加えていないため、推測の域を出ないが、人口が多いミッション集落での食物分配では、限りある食物を分配する相手を選ばざるを得ない。このため、親族間で行われる傾向が強く見られ、既存の親族関係の確認や維持という機能が顕在化しているように考えられる。また、受け手のデマンド（要求）が食物分配の特徴であるかに関する情報がないため、その点に関して判断できないことも言及しておきたい。

5. イヌイット社会における食物分配

5.1 イヌイットの生業と社会

イヌイットとはカナダ極北地域に住む狩猟・漁労民である。彼らの直接の祖先は、約1000年前にアラスカからカナダ極北地域に移動してきた捕鯨民であった。地球の寒冷化に伴い、彼らは生業の中心をホッキョククジラ猟からアザラシ猟や野生トナカイ猟、ホッキョクイワナ猟へと変更し、季節的な移動生活を行うようになった。そして1500年代以降にヨーロッパから来た捕鯨者、タラ漁民、探検家、その後は宣教師らと散発的に接触し始めた。

大きな転機は、1920年代にホッキョクギツネの毛皮取引に参加したことであった。その後、1960年代ごろからカナダ政府の作り出した集落に移り住み、そこから狩猟・漁労に出かけるようになった。彼らは、生業（狩猟・漁労）と賃金労働とい

う2つの経済が混交した状況下で生活を営んでおり、現在では、多くのイヌイットは集落内に仕事をもち、賃金労働を行い、仕事の合間や休日に狩猟・漁労に出かける。また、夏場には2週間以上にわたり家族でキャンプに出かけることもあるが、定住生活を開始して以来、夏季キャンプに出かける期間は短縮傾向にあるとともに、キャンプに出かけない人も増加しつつある。スノーモービルや船外機付きカヌー、4輪バギーやライフル、漁網の利用によって、狩猟や漁労では個人や少人数のハンターが単位となり、集団猟はシロイルカ猟やセイウチ猟を除けば、ほとんど行われなくなった。しかし、彼らは夏キャンプ地でも村内でも獲物の分配を頻繁に実践している。

筆者の調査地であるアクリヴィク村は、ハドソン湾東北沿岸（北緯60度48分、西経78度12分）に位置する。村はハドソン湾側から内陸に向かって東西2キロメートル、南北500メートルの区画にプレハブ住宅が建築されている。2016年の村の総人口は632人、総世帯数155、1世帯平均の員数は4.1人である。村のイヌイットは、村内にある店舗でカナダ南部地域産の食料を購入するとともに、狩猟・漁労によって食料を入手している。彼らの摂取するたんぱく質の約60%は、地元産の獣肉や魚に由来するが、カロリー摂取の点から見ると全体の60%以上は店舗で購入したパンやパスタ、ジャガイモ、ピザ、ソーセージ、ハム、卵、牛肉、豚肉、鶏肉、小麦粉、ラード、バター、牛乳、砂糖などの食品や食材に由来する。すなわち、イヌイットはたんぱく質摂取の約60%は地元産の肉や魚から、カロリー摂取の約60%以上は、外来食品から得ている。老人世帯では地元産の食料が好まれ、若者世帯では欧米食が好まれる傾向が見られる（岸上 2005）。

5.2 イヌイットの食物分配

イヌイットの食物分配は、狩猟時の分配、キャンプ地での分配、集落での分配に大別できる。イヌイットの食物分配の形態には地域差や歴史的变化が見られる（岸上 1998, 2007；Damas 1972；Fienup-Riordan 1983；Kishigami 2000, 2004；Nuttall 1991；Ready and Power 2018；Wenzel 2000）。また、

ヌナヴィク地域では1980年代にハンター・サポート・プログラムを利用した村全体での分配が始まった。本稿では、筆者が1984年から2004年にかけてケベック州極北地域アクリヴィク村で行った調査のデータを利用する（岸上 1998, 2007, 2010）。

5.2.1 狩猟場での獲物の第1次分配

アザラシ猟や野生トナカイ、セイウチなどを複数のハンターが捕獲した場合には、獲物はしとめたハンターのものになるが、その一部は、狩猟に参加したもしくは解体場所に居あわせた人々に分配される。仕留めたハンターが多少、大目に取り、残りを狩猟場もしくは解体場所にいる人々が全体を見ながら少量ずつ入手するというやり方が一般的である。この分配では狩猟に参加することや解体場所にいることが重要な条件であり、親族関係などの特別な関係の有無は問われない。なお、ハンター以外の個人が、獲物の分量を見て分配するには量が少なすぎると判断した場合には、分配を自主的に受けないこともある。

野生トナカイやホッキョクイワナを協働して大量に捕獲した場合には、参加したハンターの間で均等に分配されることもある。この場合も狩猟に参加することや解体・分配場所にいることが重要な条件であり、親族関係の有無は問われない。

イヌイットの場合、第1次分配では、獲物を仕留めたハンターの取る部位や他の人に分配される部位は規則によって特定されていない⁵⁾。また、最近の狩猟パートナーは、親子、兄弟、いとこ同士、祖父と孫など拡大家族関係にある人が多いので、獲物の分配は、必然的に異なる世帯に住む同一の拡大家族に属するハンター間で行うことが多い。

5.2.2 狩猟・漁労キャンプ地での食物分配

獲物を狩猟・漁労キャンプ地に持ち帰ると、肉や魚が狩猟・漁労に参加していない人、もしくは家族にも分配することがある。また、複数の家族から構成される夏のキャンプ地では獲物を共食する（食事に参加する）ことによって分かちあっている。キャンプ自体がひとつの拡大家族から構成されることが多いが、親族関係にない人でも同じキャンプにいる場合は共食を通して食物の分配にあずかることができる。

5.2.3 定住村落での食物分配

ハンターが獲物を村に持ち帰ると、自宅で保管するか、ハンターの両親や祖父母が存命の場合には、彼らの家に持っていくことが多い。その両親や祖父母の家に彼らの子供や孫たちがほぼ毎日、昼食や夕食を食べに行き、朝食以外は共食する。このように野生獣の肉や魚は拡大家族内の共食をとおして日々、分配されている。食べるものがない人は、友人や隣近所の世帯の昼食や夕食に参加することによって、食物を入手することもある。

村の人口が数十人（現在のアクリヴィク村は600人以上）を超すと、一人のハンターが持ち帰った獣肉や魚を村全体で分配することは物理的に不可能になる。このため、日常の獣肉や魚の分配は、拡大家族内や隣近所の者との間で行われる傾向が明確に見られる。

一方、ハンターは時々、村内の寡婦や古老たち、ハンターのいない家族に獲物を届けることもある。また、家に食料が無くなった村人がハンターの家にも肉や魚をもらいに来ることもある。これは広義の「要求に基づく分配（demand sharing）」である。この場合にはハンターもしくはハンターの妻の裁量で分配が行われる。これらの分配は、親族関係がない人にも行われる。

また、クリスマスや復活祭の時など特別な機会には、村の体育館で、村や教会が主催する村全体の共食会が行われる。この共食会には大半の村人が参加する。

5.2.4 ハンター・サポート・プログラムによる食物分配

村落内での生活が中心になると、年々、狩猟漁労に行く頻度が減り、夏キャンプに出かける期間も短縮してきた。このため1980年代には、ヌナヴィク地方政府はケベック州政府と交渉し、狩猟漁労を維持、促進するためのハンター・サポート・プログラムを導入した。この制度を利用して、アクリヴィク村では村のハンターに大型のコミュニティ・ボートを利用して遠隔地にシロイルカやセイウチを取りに行かせ、獲物を村の全世帯に均等に分配することを開始した。イヌイットが個人的に入手できない獣肉などを新しい分配制度によって提供するようになった（岸上 1998, 2007, 2010）。

Kishigami 2000)。

また、村役場は同プログラムを利用して村のハンターから野生トナカイやホッキョクイワナなどを買い取り、村所有の冷凍庫に保管し、食料が不足しているイヌイットが必要に応じて獣肉や魚を無償で入手することができるようにしている(岸上 1998, 2007, 2010; Gombay 2005; Kishigami 2000)。

5.3 イヌイットの食物分配の特徴

現在のイヌイットは、生業経済と貨幣経済が混交した経済システムのもとで生活を営んでおり、狩猟漁労に従事する頻度は減少傾向にある。一方、狩猟漁労活動に由来する獣肉や魚の食物分配は頻度が減少しつつあるとはいえ、実践され続けている。次に、イヌイットの食物分配の特徴について整理する。

第1に、狩猟場における第1次分配では獲物をどのように分配するがに關してのルールは存在しない⁶⁾。獲物を捕獲したハンターが多少、大目に肉などをとるが、それ以外の部位は狩猟漁労への参加者もしくは解体・分配場所にいる者に分配される。獲物が大量にある場合は、均等に分配されることが多い。

第2に、キャンプ地や村落では、おもに食事の共食を通して食物が分配されている。数家族からなる小規模のキャンプ地では、親族関係がなくても同じキャンプ地にいれば、すべての人が共食に参加するが、数百人規模の村落では人々は彼らの祖父母や両親、おじ・お婆の家の昼食や夕食に参加し、各大家族内に限定した共食による食物の分配が見られる。

第3に、キリスト教の復活祭やクリスマスの時などの共食会によって、全村人に対して食物の均等な分配が行われている。これらの分配には村役場や教会などが介在しており、食物分配の形態は「再分配」であると言える。

第4に、食物分配には個人、もしくは家族レベルで食物の平準化機能がある。狩猟や漁労の腕前にはハンター間に格差が存在するため、一方的に与えることの多いハンター（もしくは家族）と一方的に受けとることが多いハンター（もしくは家

族）が存在しているが、食物分配を通してほぼすべてのイヌイットが食物を入手することができ、かつ食物にアクセスする格差を低減させる平準化機能がある。ただし、イヌイットの食物分配は大家族内で行われることが多いため、各大家族内での個人間や世帯間での格差の低減である。村落内では大家族を越えた食物分配も見られるが、その頻度は大家族内と比べると低い。したがって、イヌイットの村落での食物分配は、各大家族内での食料の安全保障機能があると言えよう。

第5に、イヌイットの食物分配では、同じ場所にいることと親族関係が重要な要因である。

第6に、近年はハンター・サポート・プログラムを利用した村役場主導の食物分配が行われている。この分配では、村内のすべての世帯が均等に肉や脂皮を入手できるようになっている。この食物分配の形態は、再分配である。

第7に、食物分配は大家族関係やアクリヴィク村の住民である人々の間で行われているため、食物分配を通じて特定の社会関係が確認され、維持されている。また、村レベルでの共食会は、村人意識（アイデンティティ）の確認や維持の機能を果たす。

第8に、現在の食物分配の実践は、食料の入手という点だけでなく、イヌイットの文化的に価値を置く食物の入手に貢献しており、イヌイットの文化的満足感を満たしている。

第9に、イヌイットの食物分配では与え手側の自主性や規則に基づく分配が多い。食物を持っていないイヌイットが、他の人の所に食物をもらいに行ったり、食事に参加したりすることもある。これは、広義のデマンド・シェアリングであるが、頻度の点から見ると自主的な分配や規則の分配の方がはるかに多い。

6. 比較検討

本稿では、地域と政治経済的状況の異なる3つの狩猟採集民社会の現代の食物分配を紹介した。ここではそれらの事例を形態、機能・効果、特徴の点から比較検討する。

6.1 食物分配の形態

筆者は、これまでの研究で文化人類学者が食物分配として研究してきた対象の形態は、移譲（分与＝一方的にあたえること）、交換、再分配であることを指摘した（岸上 2003b, 2007；Kishigami 2004）。

アカ社会では、獲物の第1次分配と第2次分配、第3次分配の多くは、規則に基づく、もしくは所有者の自主的な分与の形態をとっている。獲物を各核家族の中心的な役割を担う女性の元に集め、その女性が調理した後で、料理を他の核家族へと分配するので、料理の分配は再分配の形態をとっていると言える。

アチェ社会については、カップランやガルヴェンらは、研究の前提として互酬性に着目しているため、食物分配を交換と考えている。彼らは、食物の流れを重量やカロリー摂取量の視点から統計的に把握しているが、どのような形態かについては詳細な記述を行っていない。このため、アチェ社会の食物分配の形態については不明である。

イヌイット社会では、獲物の分配の基本的形態は自主的な分与である。一方、両親や祖父母の家に集められた食物を調理した昼食や夕食に参加して食物を分け合う形態が存在している。また、ハンター・サポート・プログラムにおける獲物の分配は、村に一度集められた獲物を役人が村人に分け与えるという形態をとる。これらは再分配の形態であると言える。

3社会における食物分配の形態を見る限り、基本は分与と再分配である可能性が高いと言える。

6.2 食物分配の機能・効果

6.2.1 リスク分散機能

狩猟活動は、アカ社会、アチェ社会、イヌイット社会において個人差や幸運に左右されることが多い。3社会とも腕の良いハンターは獣肉などの与え手となり、そうでないハンターは受け手になることが報告されている。また、これら3社会ではキャンプ成員間や親族間で、持つ者が持たない者へと食物を提供して、すべての家族が食物へアクセスできるようになっている。従って、食物分配は、人々の食料獲得においてリスクを分散させ

る機能を有していると言える。食物分配には食の安全保障機能があると言える。

6.2.2 平準化機能

食物分配は、3社会において狩猟に成功したハンターや彼の家族からそれ以外の人々やその家族に獣肉などの食物を提供する手段であるため、個人間や家族間で食物へのアクセスの均等化とともに、消費量の平準化が見られる。

一方、イヌイットの村落での獲物の分配や日常的な昼食・夕食での共食は、各拡大家族内で食物消費の平準化の機能を有している。アカもアチェも集落での食物や料理の分配は、村全体というよりも各拡大家族内の個人間や家族（世帯）間の食物消費の平準化の機能を有していると考えられる。

これら3社会では食物分配による食物の所有量・消費量の平準化が見られるが、人口の少ないキャンプと人口の多い村落では差異が認められる。すなわち、前者では全家族（世帯）間での分配が可能であるため、平準化が見られる。一方、後者では分量が限られた獲物を全世帯に分配することは難しいため、特定の拡大家族（親族）集団内で分配される。このため拡大家族内で食物の所有量・消費量の平準化が見られる。

6.2.3 社会関係再生産機能

アカ社会、アチェ社会、イヌイット社会では、キャンプを構成する個人や家族集団の間で獲物や食物が分配されるので、キャンプ成員の間の社会関係は食物分配を通して確認され、維持される。

一方、人口規模が大きくなる集落内での食物分配は、多くの家族や人々への分配が難しいため、3社会とも近隣の人々や家族、もしくは拡大家族関係にある人々や家族に食物の分配が行われている。したがって、村落内の食物分配は、近隣関係と親族関係に基づく社会関係の確認や再生産の機能があると考えられる。

6.2.4 社会的名声獲得機能

アチェ社会ではデータ不足のため食物分配の社会的名声獲得機能の有無について確認できなかった。アカ社会の象狩りの名人ツーマやイヌイットの腕の良いハンターは社会的な名声を得ているが、食物分配による名声の獲得については、確証を得ることができなかった。イヌイット社会では食物

を他の人やその家族により多く与える人は、社会的な名声や良い評判を得ていると考えられる。ただし、それらは政治権力に直接、結び付かない点が狩猟採集民の特徴であるように思われる。

食物分配と社会的な名声・評判との関係の検証は、今後の課題である。なお、筆者自身は、イヌイットのハンターが食物を与え続けている理由のひとつは、ハンターがコミュニティの他の成員(村人)から社会的な名声や良い評判を得ることによって心理的な満足感を得ることができるからだと考えている(Kishigami 2000)。また、極北地域のハンターはコミュニティ全体のウェルビーイング(well-being)に貢献することが重要であると考えており、食物分配することに喜びを感じていると考えられる(岸上 2012, 2014; Bodenhorn 2000; Fienup-Riordan 1983; Wenzel 1991)。

6.2.5 優劣関係・負い目創出機能

モース(2014: 197, 295, 377)は、モノや食物の一方的な贈与は、与え手と受け手の間に優劣関係や受け手の負い目感情を生み出すと指摘した。ところで、3社会では、腕の良いハンターがそうでないハンターや彼らの家族に、より多くの食物を一方的に与えていることが報告されている。では、狩猟の下手なハンターや食物をいつももらっている人たちは、劣位に置かれ、負い目を持っているかという点、3社会ともそうではない。食物や獲物を持っている人が持っていない人に与えるのは当たり前であり、ない時には持っている人からもらうのは当然だと考えている。言い換えれば、狩猟採集民社会の食物分配は、優劣関係や負い目感情を生み出すとは限らないことを示している⁷⁾。

これは、乳児期の終わり頃から、両親や祖母、おじおばら年長者が子供に食物分配をすることが社会的規範であり、当たり前のことであると教え続けているからであると考えられる。通常、食物分配を行っている人になぜ獲物や食物を他者に与えるのかを問うても、ほとんどの当事者は、質問の意味すら理解できないし、その理由を言葉で表現することもできない。それは、社会化・文化化の過程でその実践が疑問の余地をはさまない当然のこととして婉曲的に教えられ、無意識のうちに内面化しているからである(岸上 2016: 10; 園田

2019: 249; ヒューレット 2020: 112, 129-130)。このような状況では、食物分配は与え手と受け手の間に優劣関係や受け手側の負い目意識を生み出すことが少ない。

筆者が1980年代半ばにイヌイット調査を行った時に驚いたことのひとつは、他のハンターや人から獣肉をもらっても、受け手は与え手に「ありがとう」など感謝を言葉で伝えないことであった。それはあたかも受け手がもらうのが当然のことであるような態度と雰囲気であった⁸⁾。一方、他の人に食物を分け与えることをせず、もらい続けている人は、悪口を言われたり、評判がよくなかったりした。私の現地での体験からすると当時は食物分配を行うことは当たり前のことで、与え手と受け手の間に優劣関係や受け手側の負い目意識を生み出しているようには思えなかった。なお、誤解を避けるために補足すると、急激な社会変化により獣肉の流通量と食物分配の頻度が減少し、その範囲も限定的になってきたため、現在の社会的脈絡では非親族間の食物分配は優劣関係を生み出す場合があることや食物の受け手が与え手に対して感謝を口にすることがあることを指摘しておきたい。

6.3 狩猟採集民社会の食物分配の特徴

ここでは、狩猟採集民社会の食物分配について、人口規模、食物の分量、環境観・世界観、要求という4つの特徴との関連から検討する。

6.3.1 人口規模と食物分配

これまで数家族でおよそ30人以内からなる狩猟採集民の居住集団⁹⁾では、食物分配が居住者全員を巻き込んで行われていることが知られていた。B.ウィンターハルダーは、7~8人のハンターを擁する小規模集団において食物分配の効果は最大になると指摘している(Winterhalder 1986a, 1986b)。E.スミスは、集団規模が大きくなり、対面的でなくなると人々は貯蔵を始めるため、食物分配は有効に機能しなくなると述べている。また、食物分配を実施し続けるためには相互監視が必要だが、集団規模が大きくなるとそれは困難になる(Smith 1988)。

アカ社会、アチェ社会、イヌイット社会のすべ

てにおいて、人口規模が小さなキャンプ集団と人口規模が大きな村落との間には食物分配の内容に差があることが分かった。前者では食物分配の頻度が多く、ほぼ同一のキャンプ地に住む全員を巻き込むが、後者では少なくとも食物分配の相手が選別され、より限定的になる。特に、これら3社会で共通しているのは、前者では親族関係のあるなしにかかわらず、同じキャンプ地にいるという場の共有が食物分配の重要な要因となっている点、および村落では近親族者により多くかつより頻繁に食物の分配が行われている点である。このことから、狩猟採集民社会では居住集団の人口規模が小さい場合は場の共有が、居住集団の人口規模が大きい場合は親族関係が、食物分配の実践の上で重要な条件となっていると言える。

6.3.2 食物の分量と食物分配

アカ社会を調査した北西 (1997: 11,13) は、彼らは分量が大きい獲物をキャンプ集団でより多くの人 (もしくは家族) に分配し、分量の小さい植物性の採集物はより限られた人 (もしくは家族) に分配する傾向が強いことを指摘している。このことは、アチェ社会を調査した結果からも同様な指摘がなされている (Gurven, Hill and Kaplan 2002: 104)。イヌイット社会でもシロイルカやセイウチのように個体の重量がゆうに500キログラムを超す獲物や一度に何十尾も捕獲されたホッキョクイワナのような大量の獲物は、夏キャンプ地内や村落内でハンターの拡大家族を越えて広範に分配する傾向がある。一方、夏に採集するベリー類は、ほとんど分配せず、採集した個人か家族内で消費することが多い。

以上から狩猟採集民社会では、分量の多い獲物はより広範に分配する傾向があると言える。一方、少量の食物や小型の獲物は分配しない傾向がある。

6.3.3 環境観・世界観と食物分配

狩猟採集民のもつ環境観や動物観に関する考え方が、食物分配の実践に深く関係していることが指摘されてきた (岸上 2012, 2014; スチュアート 1991; Bird-David 1991; Bodenhorn 2000; Brewster ed. 2004; Fienup-Riordan 1993; Nuttall 1991; Stairs and Wenzel 1992)。たとえば、インドの狩猟採集民ナヤカを研究したN.バード=デービッド

(Bird-David) は、ナヤカにとって森林環境は彼らに食物を与えてくれる親のような存在であると考えていると指摘した。そして人間はおたがいに兄弟姉妹のような関係であると言う。この親族関係のメタファーに基づく環境観が、ナヤカの人々が他者に食物を分け与えることの倫理的基盤となっていると主張した (Bird-David 1991)。また、アラスカのイヌピアットは、ホッキョククジラが自らの命を自らの意思でハンターに提供し、捕獲されるので、得た肉や脂皮は独り占めせず、他の人々と分かちあわなくてはならないと考えている (岸上 2012, 2014; Bodenhorn 2000)。

アカ社会の環境観について、ここで紹介した北西は報告していないが、ムプティ・ピグミーを研究したC.ターンブル (1976) は、アカの人々は森を父であり母であり、食物など恵みを与えてくれる存在だと報告している。また、ヒューレット (2020: 79-80, 142-143) は、アカの環境観や環境との関係が、彼らの食物分配を行う上での基盤となる価値観と深くかかわっていると指摘している。アチェ社会については、彼らの食物分配と環境観との関係は報告されていない。一方、イヌイット社会については彼らの動物観がカリブー肉やシロイルカの脂皮の分配と関係があることが報告されている (スチュアート 1991; Kishigami 2000)。北アメリカ亜極北地域の先住民の間にもその関係が見られる (ナダスディ 2012)。

この食物分配と環境観や動物観との関係については、3社会に当てはまりそうではあるが、アチェ社会については確たる証拠が提示されていないため、さらなる調査が必要である。

6.3.4 要求に基づく食物分配

狩猟採集民の食物分配の基本的な特徴を要求に基づく食物分配 (demand sharing、以下、デマンド・シェアリング) であると考えてよいか。この問いは、ウィドロックが新たに提案した分配の定義の妥当性にかかわる。

デマンド・シェアリングの概念は、オーストラリア先住民に顕著に見られる分配開始の引き金としての「要求 (デマンド)」に焦点を合わせたものである。N.ピーターソンはこの分配は、ほぼすべての狩猟採集民社会にあてはまるのではないか

と考えている (Peterson 1993)。ここで留意すべき点は2つある。ひとつは食料を持っていない人が持っている人にくるように要求することは、ほぼすべての狩猟採集民社会で起こっていることであり、その点では普遍性がある。ふたつ目は、「要求する」という場合、その要求の表現形態が、懇願することや言葉で強く要求すること、食事の時間に食事の場に現れることによって暗示的にお願いすることなど、強弱も含めてさまざまである (丸山 2016; Widlok 2019)。広義に解釈すると、ほぼすべての狩猟採集民社会には、デマンド・シェアリングは存在していると言える。ただし、デマンド・シェアリングが狩猟採集民の中心的食物分配の形式であるかどうかは別の問題である。

アカ社会の食物分配の場合でも、料理の分配は自主的な分配であるし、獲物の第1次分配は規則で決まっており、デマンド・シェアリングが存在していても中心的なものであるとは限らないと考える。アチェ社会についてはデマンド・シェアリングの実践に関する情報が少ないため、判断できない。イヌイット社会では、デマンド・シェアリングのような分配も確かに実践しているが、自主的な分配と規則に則った分配が中心だと考える。以上から、デマンド・シェアリングは狩猟採集社会に広く見られるとしても、同社会の中心的食物分配であるとは限らないと主張したい。

ウィドロックは当初、分配を「他者が価値あるものをとることを許すこと (“sharing is allowing others to take what is valued.”)」 (Widlok 2013) と考えていたが、それをさらに発展させ、分配とは、デマンド・シェアリングに基づいて価値あるモノ・サービスにアクセスすることを可能にする社会実践であると考えているに至っている (Widlok 2017: XVII)。本稿で提示した事例に基づけば、「要求」を分配の中心で不可欠な側面であると考えすることは難しい。従って、デマンド・シェアリングに基づく「分配」の定義の有効性に限界があると考えられる。

なお、筆者は、分配や贈与の概念を比較検討したラッセル・ベルク (Belk 2009: 717) の見解¹⁰⁾に基づいて、分配を「人間が有用なリソースにアクセスするための、もしくは有用なリソースを他

者へと流通させるための、力づくではなく個体から個体に食物などリソースを移動する社会的実践」と広く考える方が、記述や分析のための概念としては有用であると考えられる。

7. 結論

狩猟採集民社会では、ハンターや獣肉の所有者が、肉などの食物を他者 (自分の家族世帯以外) に与えたり、分かち合ったりする行為が頻繁に見られる。この行為は「食物分配」として一括して呼ばれてきたが、その内容や特徴は集団、地域、時代によって差異が見られる。

本稿では、アカ社会、アチェ社会、イヌイット社会における食物分配の形態、機能・効果、特徴に関して比較し、共通性を抽出しようと試みた。その結果を提示する。

狩猟採集民の食物分配の形態であるが、彼らの基本的形態は分与と再分配である。この見解は、狩猟採集民社会に交換の形態が存在していないと言っているのではなく、食物分配が交換の形態で行われることが少ないということである。

狩猟採集民社会における食物分配の機能・効果は次の通りである。第1に、食物分配は、人々の食料獲得において、食料不足のリスクを分散させる機能を有している。第2に、食物分配には個人間や家族間で食物の一時的所有量や消費量を平準化する効果がある。第3に、コミュニティ内における特定の個人間や特定の家族間の社会的紐帯は、食物分配の実践を通して確認され、維持される。第4に、イヌイット社会の事例が示すように、より頻繁に食物分配を行う人は、社会的名声や良い評判を得る可能性があるが、アカ社会とアチェ社会では十分な証拠を入手することができなかった。第5に、贈与論におけるモースの指摘に反して、狩猟採集民社会の食物分配は優劣関係や負い目感情を生み出すとは限らない。以上のことから、狩猟採集民社会の食物分配の実践は複数の機能や効果を併せ持っていると言えよう¹¹⁾ (岸上 2003a, 2003b)。

狩猟採集民社会における食物分配の特徴について比較した結果は次の通りである。第1に食物分配が行われる集団の規模によって、その特徴には

違いが見られる。狩猟採集民社会では居住集団の人口規模が小さい場合は近くににいること (close proximity) やともにいること (co-presence) という「場の共有」が、居住集団の人口規模が大きい場合は親子関係や兄弟姉妹関係のような「親族関係」(kin relationships) が、食物分配の実践の上で重要な条件ないしは要因となっている。第2に、狩猟採集民社会では分量の多い獲物はより広範に分配される。第3に、食物分配と環境観や動物観との間には深い関係がありそうであるが、アチェ社会については確たる証拠が提示されていないため、制限付きの一般化しかできない。第4に、食料を持っていない人が持っている人にくれるように要求することは、ほぼすべての狩猟採集民社会で見られるが、このデマンド・シェアリングが狩猟採集民の食物分配の中心的な特徴であるとは限らない。そしてこの4番目の結論に基づいて、デマンド・シェアリングに基づくウィドロックの「分配」の定義の有効性には限界があると言わざるを得ない。筆者は、分配 (sharing) とは、人間が有用なリソースにアクセスするための、もしくは有用なリソースを他者へと流通させるための、力づくではなく個体から個体に食物などリソースを移動する社会的実践であると言う定義を提案する。

本稿は狩猟採集民社会における食物分配を、3つの社会の事例で比較検討した試論である。食物分配に関する民族誌的情報の質と量には、狩猟採集社会ごとに大きな差があるため、単純な比較による一般化には問題がある点は、筆者自身がはっきりと自覚している。今回提示した暫定的な結論が妥当かどうかを検証するために、アフリカのハッザやサン、さらにオーストラリア先住民らの事例を加えて、さらなる比較検討を行いたいと考えている。

(謝辞)

本稿を執筆するにあたって、天理大学の服部志帆さんからアカの食物分配についてご教示いただいた。また、原稿に対し、国立民族学博物館外来研究員の中村真里絵さんからコメントを頂戴し、改稿の参考にさせて頂いた。なお、本稿は、令和2

年度科学研究費・基盤研究 (A) 「北米アラスカ・北西海岸地域における先住民文化の生成と現状、未来に関する比較研究」(課題番号19H00565) の成果の一部である。

注

- 1) 食物分配に関して詳細な調査が行われてきたグループには、本稿で取り上げたグループ以外にも、アフリカのサン社会 (Dowling 1968 ; Lee 1971 ; 今村 1993, 1996 ; 丸山 2016) やハッザ社会 (Woodburn 1998)、オーストラリア先住民社会 (Altman and Peterson 1998 ; Macdonald 2000 ; Peterson 1993)、アラスカのイヌピアット社会 (岸上 2012 ; Bodenhorn 2000 ; Burch 1988) がある。これらを含めた比較研究は、今後の課題としておきたい。
- 2) 分配の定義については、Belk (2010) を参照されたい。筆者の知る限り、「分配」を理論的に正面から取り上げた最初の論文は、Price (1975) である。
- 3) カップランとヒル (Kaplan and Hill 1985) は、アチェの事例で血縁淘汰仮説、互恵的利他主義仮説、容認される盗み仮説、協働労働仮説を検証し、それぞれの仮説単独ではアチェの食物分配は説明できないことを示した。ガルヴェンら (Gurven, Hill, and Kaplan 2002) は、社会的シグナル仮説を検証しようとしてみたが、この仮説単独ではアチェの食物分配を十分に説明することはできなかった。
- 4) マルセル・モースの贈与論については、岸上 (2016) を参照されたい。
- 5) ネットリク・イヌイット社会には、かつてアザラシ肉交換パートナー制度が存在していた。この場合、ハンターは、捕獲したアザラシの各部位をその名称のついたパートナーに与える制度があった。この場合には、特定の人に与える部位が決まっていた (Van de Velde 1956 ; Balikci 1970 ; Damas 1972)。
- 6) アラスカのイヌピアットによるホッキョククジラ猟の第1次分配では、捕獲に成功した集団、捕鯨や解体を助けた集団に対してどの部

位が分配されるべきかについて規則が存在している（岸上 2012）。また、ヌナヴィク地域のシロイルカ猟では、第1次分配に関する規則が存在していた（Grabum 1969）。

- 7) 小田は、狩猟採集民の食物分配では、ハンターと肉の所有者を分離させ、かつ与え手と受け手が幾重にも重なりあうようにすることによって、受け手に生じがちな負い目がいまいになるように工夫されていると指摘している（小田 2019: 13, 14）。この見解を実証するのは難しい。筆者自身は、負い目をあいまいにさせているのは、社会化の結果だと考えている。なお、小田の問題点は、すべての「モノのやりとり」を交換概念のもとで一括して把握し、分配をその一様式として分類していることである。なぜならば、分配は交換ではない、物流の別の様式であるからだ。
- 8) グリーンランドのイヌイット社会を調査したピーター・フロイヘン（Peter Freuchen）は、イヌイットの肉の分与は贈与ではないという老人の語りを紹介している。「あなたは自分の肉に対してお礼など言ってはなりません。その肉をもらふことはあなたの権利なのです。この地では誰も他人に従属しようとは願っていません。だから、誰も贈り物を与えたり受け取ったりしないのです。そうすれば従属することになるからです。贈り物をするのであなたは奴隷を作ります」（Freuchen 1981: 109）。この翻訳は小田（2019: 11-12）から採録。
- 9) ケリーは狩猟採集民のバンド集団の平均的な人数を28.4人と推定している（Kelley 1995: 211）。
- 10) ラッセル・ベルクは分配を「私たちの持ち物を他の人々が利用するために、他の人に配分する行為やプロセスである。そして/もしくは、他の人々から自分たちが利用する目的で何かを受け取るもしくは手に入れる行為およびプロセスである」と定義している（Belk 2009: 717）。
- 11) 筆者は、狩猟採集民社会の「食物分配」は、M. モースの言う「全体的社会現象」であると考え（岸上 2016）。

参考・引用文献

(和文)

- 市川光雄（1991）「平等主義の進化史的考察」田中二郎・掛谷誠編『ヒトの自然誌』pp.11-34, 東京：平凡社。
- 今村薫（1993）「サンノ協同と分配—女性の生業活動の視点から」『アフリカ研究』42: 1-25。
- 今村薫（1996）「ささやかな饗宴—狩猟採集民ブッシュマンの食物分配」田中二郎ほか編『自然社会の人類学』pp.51-80, 京都：アカデミア出版会。
- 小田亮（2019）「[交換の四角形]とその混成態—市場社会を乗り越えるための試論—」『人文学報』515-2(社会人類学分野12)：1-22。
- 岸上伸啓（1998）『極北の民カナダ・イヌイット』東京：弘文堂。
- 岸上伸啓（2003a）「狩猟採集民社会における食物分配—諸研究の紹介と批判的検討」『国立民族学博物館研究報告』27(4)：725-752。
- 岸上伸啓（2003b）「狩猟採集民社会における食物分配の類型について」『民族学研究』68(2)：145-164。
- 岸上伸啓（2005）「カナダ極北の先住民イヌイット」岸上伸啓編 pp.121-159.『極北（世界の食文化20）』東京：農文協。
- 岸上伸啓（2007）『カナダ・イヌイットの食文化と社会変化』京都：世界思想社。
- 岸上伸啓（2010）「カナダ極北地域における食糧の安全保障について—ヌナヴィク・イヌイット社会を事例として」上田晶子編『食料と人間の安全保障』pp.43-59, 大阪：大阪大学グローバルコラボレーションセンター。
- 岸上伸啓（2012）「米国アラスカ州バロー村のイヌピアットによるホッキョククジラ肉の分配と流通について」『国立民族学博物館研究報告』36(2)：147-179。
- 岸上伸啓（2014）『クジラとともに生きる—アラスカ先住民の現在』京都：臨川書店。
- 岸上伸啓（2016）『贈与論 再考—人類社会における贈与、分配、再分配、交換』岸上伸啓編『贈与論再考 人間はなぜ他者に与えるのか』pp.10-39, 京都：臨川書店。
- 北西功一（1997）「狩猟採集民アカにおける食物

- 分配と居住集団』『アフリカ研究』51: 1-28。
- 北西功一 (2002) 「分配者としての所有者—狩猟採集民アカにおける食物分配」市川光雄・佐藤弘明編『森と人の共存世界』pp.61-91, 京都: 京都大学出版会。
- 北西功一 (2004) 「狩猟採集社会における食物分配と平等—コンゴ北部アカ・ピグミーの事例」寺嶋秀明編『平等と不平等をめぐる人類学的研究』pp.53-91, 京都: ナカニシヤ出版。
- スチュアートヘンリ (1991) 「食糧分配における男女の役割分担について」『社会人類学年報』17: 115-127。
- 園田浩司 (2019) 「やがて手離す言葉をめぐる言語社会化—狩猟採集社会バカの子どもとbangà」『文化人類学』84(3): 243-261。
- 竹内潔 (1995) 「狩猟活動における儀礼性と楽しさ—コンゴ北東部の狩猟採集民アカのネット・ハンティングにおける共同と分配」『アフリカ研究』46: 57-76。
- 丹野正 (1991) 「「分かち合い」としての「分配」」田中二郎・掛谷誠編『ヒトの自然誌』pp.35-55, 東京: 平凡社。
- コリン・ターンブル (1976) 『森の民』藤川玄人訳, 東京: 筑摩書房。
- ポール・ナダスティ (2012) 「動物にひそむ贈与—一人の動物の社会性と狩猟の存在論」近藤祉秋訳, 奥野克巳・山口未花子・近藤祉秋編『人と動物の人類学』pp.291-348, 横浜: 春風社。
- 西田利貞・保坂和彦 (2001) 「霊長類における食物分配」西田利貞編『ホミニゼーション』(生態人類学 8) pp.255-304, 京都: 京都大学学術出版会。
- ボニー・ヒューレット (2020) 『アフリカの森の女たち 文化・進化・発達の人類学』服部志帆・大石高典・戸田美佳子訳, 横浜: 春秋社。
- 丸山淳子 (2016) 「誰と分かちあうのか—サン」の食物分配にみられる変化と連続」岸上伸啓編『贈与論再考 人間はなぜ他者に与えるのか』pp.184-208, 京都: 臨川書店。
- マルセル・モース (2014) 『贈与論 他二編』(岩波文庫) 森山工訳, 東京: 岩波書店。
- (英文)
- Altman, J. and N. Peterson (1998) Rights to Game and Rights to Cash among Contemporary Australian Hunter-Gatherers. In T. Ingold, D. Riches and J. Woodburn (eds.) *Hunter-Gatherers*, Vol.2. *Property, Power and Ideology*, pp. 75-94. Oxford: Berg.
- Bahuchet, S. (1990) Food Sharing among the Pygmies of Central Africa. *African Studies Monographs* 11 (1): 27-53.
- Balikci, A. (1970) *The Netsilik Eskimos*. Garden City, N. Y.: Natural History Press.
- Belk, R. (2009) Sharing. *Journal of Consumer Research* 36(5): 715-734.
- Bird-David, N. (1990) The Giving Environment: Another Perspective on the Economic System of Gatherer-hunters. *Current Anthropology* 31: 189-196.
- Bodenhorn, B. (1990) I'm Not the Great Hunter, My Wife Is: Inupiat and Anthropological Models of Gender. *Études/Inuit/Studies* 14 (1/2) : 55-74.
- Bodenhorn, B. (2000) It's Good to Know Who Your Relatives Are but We were Taught to Share with Everybody: Shares and Sharing among Inupiat Households. In G. W. Wenzel, G. Hovelsrud-Broda and N. Kishigami (eds.) *The Social Economy of Sharing: Resource Allocation and Modern Hunter-Gatherers* (Senri Ethnological Studies 53), pp. 27-60. Osaka: National Museum of Ethnology.
- Brewster, K. (ed.) (2004) *The Whales, They Give Themselves: Conversations with Harry Brower, Sr.* Fairbanks: University of Alaska Press.
- Burch, E. S. (1988) "Mode of Exchange in Northwest Alaska" in T. Ingold, D. Riches, and J. Woodburn (eds.) *Hunters and Gatherers*, Vol 2. *Property, Power and Ideology*, pp.95-109. Oxford: Berg.
- Dowling, J. (1968) Individual Ownership and the Sharing of Game in Hunting Societies. *American Anthropologist* 70: 502-507.
- Fienup-Riordan, A. (1983) *The Nelson Island Eskimo*. Anchorage: Alaska Pacific University Press.
- Freuchen, P. (1981) *Book of the Eskimos*. New York: Fawcett
- Gomby, N. (2005) The Commoditization of Country

- Foods in Nunavik: A Comparative Assessment of Its Development, Applications, and Significance. *Arctic* 58(2): 115-128.
- Graburn, N. H. H. (1969) *Eskimos without Igloos: Social and Economic Development in Sughuk*. Boston: Little, Brown and Company.
- Gurven, M., K. Hill and H. Kaplan (2002) From Forest to Reservation: Transitions in Food Sharing Behavior among the Ache of Paraguay. *Journal of Anthropological Research* 58(1): 91-120.
- Ingold, T. (1988) Notes on the Foraging Mode of Production. In T. Ingold, D. Riches and J. Woodburn (eds.) *Hunter-Gatherers*, Vol.1. *History, Evolution and Social Change*, pp. 269-285. Oxford: Berg.
- Kaplan, H., K. Hill, K. Hawkes, and A. Hurtado (1984) Food Sharing among Ache Hunter-Gatherers of Eastern Paraguay. *Current Anthropology* 25(1): 113-115.
- Kaplan, H. and K. Hill (1985) Food Sharing among Ache Foragers: Tests of Explanatory Hypotheses. *Current Anthropology* 26(2): 223-246.
- Kelley, R. L. (1995) *The Foraging Spectrum: Diversity in Hunter-Gatherer Lifeways*. Washington and London: Smithsonian Institution Press.
- Kishigami, N. (2000) Contemporary Inuit Food sharing and Hunter Support Program of Nunavik, Canada. In G. W. Wenzel, G. Hovelsrud-Broda and N. Kishigami (eds.) *The Social Economy of Sharing: Resource Allocation and Modern Hunter-Gatherers* (Senri Ethnological Studies 53), pp. 171-192. Osaka: National Museum of Ethnology.
- Kishigami, N. (2004) A New Typology of Food Sharing Practices among Hunter-Gatherers, with a Special Focus on Inuit Examples. *Journal of Anthropological Research* 60: 341-358.
- Kitanishi, K. (1996) Variability in Subsistence Activities and Distribution of Food among Different Aged Males of the Aka Hunter-Gatherers in Northeastern Congo. *African Studies Monographs* 17(1): 35-57.
- Lee, R. (1993) *The Dobe Jul'hoansi*. Fort Worth: Harourt Brace College Publishers.
- McDonald, G. (2000) Economies and Personhood: Demand Sharing among the Wiradjuri of New South Wales. In G. W. Wenzel, G. Hovelsrud-Broda and N. Kishigami (eds.) *The Social Economy of Sharing: Resource Allocation and Modern Hunter-Gatherers* (Senri Ethnological Studies 53), pp. 87-111. Osaka: National Museum of Ethnology.
- Nuttall, M. (1991) Sharing and the Ideology of Subsistence in a Greenlandic Sealing Community. *Polar Record* 27(162): 217-222.
- Peterson, N. (1993) Demand Sharing: Reciprocity and the Pressure for Generosity among Foragers. *American Anthropologist* 95(4): 860-874.
- Price, J. (1975) Sharing: The Integration of Intimate Economics. *Anthropologica* 17(1): 3-27.
- Ready, E. and E. A. Power (2018) Why Wage Earners Hunt: Food Sharing, Social Structure, and Influence in an Arctic Mixed Economy. *Current Anthropology* 59(1): 74-99.
- Smith, E. A. (1988) Risk and Uncertainty in the 'Original Affluent Society': Evolutionary Ecology of Resource-Sharing and Land Tenure. In T. Ingold, D. Riches and J. Woodburn (eds.) *Hunter-Gatherers*, Vol.1. *History, Evolution and Social Change*, pp. 222-251. Oxford: Berg.
- Stairs, A. and G. Wenzel (1992) I am I and the Environment: Inuit Hunting, Community, and Identity. *The Journal of Indigenous Studies* 3(1): 1-12.
- Van de Velde, F. (1956) Rules for Sharing the Seal among the Arviligjuarmiut Eskimo. *Eskimo* 41: 3-6.
- Wenzel, G. (2000) Sharing, Money, and Modern Inuit Subsistence: Obligation and Reciprocity at Clyde River, Nunavut. In G. W. Wenzel, G. Hovelsrud-Broda and N. Kishigami (eds.) *The Social Economy of Sharing: Resource Allocation and Modern Hunter-Gatherers* (Senri Ethnological Studies 53), pp. 61-85. Osaka: National Museum of Ethnology.
- Widlok, T. (2017) *Anthropology and the Economy of Sharing*. London and New York: Routledge.
- Widlok, T. (2019) Extended and Limiting Selves: A Processual Theory of Sharing. In N. Levi and D. Friesem (eds.) *Towards a Broader View of*

Hunter-Gatherer Sharing, pp. 25-38. Cambridge :
McDonald Institute for Archaeological Research,
University of Cambridge.

Winterhalder, B. (1986a) Diet Choice, Risk, Food
Sharing in a Stochastic Environment. *Journal of An-
thropological Archaeology* 5: 369-392.

Winterhalder, B. (1986b) Optimal Foraging: Simula-
tion Studies of Diet Choice in a Stochastic Environ-
ment. *Journal of Ethnobiology* 6: 205-223.

Woodburn (1998) Sharing Is Not a Form of Ex-
change: An Analysis of Property-Sharing in Imme-
diate-Return Hunter-Gatherer Societies. In C. Hann
(ed.) *Property Relations: Renewing the Anthro-
pological Tradition*, pp.48-63. Cambridge: Cambridge
University Press.

(人間文化研究機構・国立民族学博物館)